

## 平城宮跡東院地区中枢部の調査

(平城第423次)

平城宮には東に張り出し部(南北750m、東西250m)があり、その南半(南北350m)を東院地区と呼んでいます。都城発掘調査部では2006年度から東院地区の継続的な調査を再開しています。

今回の調査は、2007年9月末から始め、2月下旬で終了しました。2008年1月19日には現地説明会を開催し約800人の方に来ていただきました。

今回の調査ではこれまでの調査と同様に、5時期以上の変遷を確認しました。それぞれの時期において、場所を違えて大規模な建物が造り替えられています。

一番古い1期では南北に廂をつける桁行7間、梁行2間の建物と、桁行9間以上、梁行2間の南北棟総柱建物を検出しました。続く2期では桁行9間、梁行2間以上の総柱建物とその南北に建物を検出しました。この時期にはこれらの建物と併存して石組溝6条と舗装としての礫敷があります。石組溝は底石と側石が残り、とても迫力のあるものです。3期では桁行21間、梁行2間の南北棟とその北端から西に伸びる桁行5間以上、梁行2間の東西棟を検出しました。この建物について現地説明会では長廊状建

物と報告しましたが、補足調査によってこれらは単廊であることが分かりました。東院中枢部の西北隅を形成していたものと考えられます。4期にはこの区域がほぼ空地であったと考えられます。最後の5期は桁行14間以上、梁行2間の南北棟建物があり、その西にも南北7間の建物を検出しました。この時期の建物の柱抜取穴には凝灰岩切石が入っており、この時期に凝灰岩で外装した基壇建物があったことが分かりました。また、特徴的な遺物として緑釉埴せんのほかに、灯明皿の下に緡銭さしぜに(紐を通して束ねられた状態の銭貨で、和同開珎が確認されている)が納められている遺構(時期は4期以降)も見つかりました。現在保存処理を施しています。

今回の調査でのとりわけ重要な点は、奈良時代後半の短い期間に前代の建物をほぼ全面的に改作している点です。また、大規模な総柱建物や石組溝が多いという特徴は、建物の外を礫敷で舗装していることとあわせて、内裏をはじめとした宮中枢部の様相に類似しています。今回の調査において、建物配置だけでなく、舗装や排水施設など東院地区の生活空間を検討する上での足がかりを得ることができたと考えています。(都城発掘調査部 浅野 啓介)



第423次調査区全景(正面の森が宇奈多理神社 北西から)



石組溝の外側に広がる礫敷(西から)